いてふの実

宮沢賢治

青空文庫

そらのてっぺんなんか冷たくて冷たくてまるでカチカチの灼きをかけた鋼です。

そして星が一杯です。けれども東の空はもう優しい桔梗の花びらのやうにあやしい底光りをはじめました。

その明け方の空の下、ひるの鳥でも行かない高い所を鋭い霜のかけらが風に流されてサラサラサラサラ南の方へ飛んで行きました。

実にその微かな音が丘の上の一本いてふの木に聞える位澄み切った明け方です。

いてふの実はみんな一度に目をさましました。そしてドキツとしたのです。今日こそはたしかに旅立ちの日でした。みんなも前からさう思ってゐましたし、昨日の夕方やって来た二羽の烏もさう云ひました。

「僕なんか落ちる途中で眼がまはらないだらうか。」一つの実が云ひました。

「よく目をつぶって行けばいゝさ。」も一つが答へました。

「さうだ。忘れてゐた。僕水筒に水をつめて置くんだった。」

「僕はね、水筒の外に薄荷水を用意したよ。少しやらうか。旅へ出てあんまり心持ちの悪い時は一寸飲むといゝっておっかさんが云ったぜ。」

「なぜおっかさんは僕へは呉れないんだらう。」

「だから、僕あげるよ。お母さんを悪く思っちゃすまないよ。」

さうです。この銀杏の木はお母さんでした。

今年は千人の黄金色の子供が生れたのです。

そして今日こそ子供らがみんな一緒に旅に発つのです。お母さんはそれをあんまり悲しんで扇形の黄金の髪の毛を昨日までにみんな落してしまひました。

「ね、あたしどんな所へ行くのかしら。」一人のいてふの女の子が空を見あげて呟やくやうに云ひました。

「あたしだってわからないわ、どこへも行きたくないわね。」も一人が云ひました。

「あたしどんなめにあってもいゝからお母さんの所に居たいわ。」

「だっていけないんですって。風が毎日さう云ったわ。」

「いやだわね。」

「そしてあたしたちもみんなばらばらにわかれてしまふんでせう。」

「えゝ、さうよ。もうあたしなんにもいらないわ。」

「あたしもよ。今までいろいろわが儘ばっかし云って許して下さいね。」

「あら、あたしこそ。あたしこそだわ。許して頂戴。」

東の空の桔梗の花びらはもういつかしぼんだやうに力なくなり、朝の白光りがあらはれはじめました。星が一つづつ消えて行きます。

木の一番一番高い処に居た二人のいてふの男の子が云ひました。

「そら、もう明るくなったぞ。嬉しいなあ。僕はきっと黄金色のお星さまになるんだよ。」

「僕もなるよ。きっとこゝから落ちればすぐ北風が空へ連れてって呉れるだらうね。」

「僕は北風ぢゃないと思ふんだよ。北風は親切ぢゃないんだよ。僕はきっと烏さんだらうと思ふね。」

「さうだ。きっと烏さんだ。烏さんは偉いんだよ。こゝから遠くてまるで見えなくなるまで一息に飛んで行くんだからね。頼んだら僕

ら二人位きっと一遍に青ぞら迄連れて行って呉れるぜ。」

「頼んで見ようか。早く来るといゝな。」

その少し下でもう二人が云ひました。

「僕は一番はじめに杏の王様のお城をたづねるよ。そしてお姫様をさらって行ったばけ物を退治するんだ。そんなばけ物がきっとどこかにあるね。」

「うん。あるだらう。けれどもあぶないぢゃないか。ばけ物は大きいんだよ。僕たちなんか鼻でふっと吹き飛ばされちまふよ。」

「僕ね、いゝもの持ってるんだよ。だから大丈夫さ。見せようか。そら、ね。」

「これお母さんの髪でこさへた網ぢゃないの。」

「さうだよ。お母さんが下すったんだよ。何か恐ろしいことのあったときは此の中にかくれるんだって。僕ね、この網をふところに入れてばけ物に行ってね。もしもし。今日は、僕を呑めますか呑めないでせう。とかう云ふんだよ。ばけ物は怒ってすぐ呑むだらう。僕はその時ばけ物の胃袋の中でこの網を出してね、すっかり被っちまふんだ。それからおなか中をめっちゃめちゃにこはしちまふんだよ。そら、ばけ物はチブスになって死ぬだらう。そこで僕は出て来て杏のお姫様を連れてお城に帰るんだ。そしてお姫様を貰ふんだよ。」

「本当にいゝね、そんならその時僕はお客様になって行ってもいゝだらう。」

「いゝともさ。僕、国を半分わけてあげるよ。それからお母さんへは毎日お菓子やなんか沢山あげるんだ。」

星がすっかり消えました。東のそらは白く燃えてゐるやうです。木が俄かにざわざわしました。もう出発に間もないのです。

「僕、靴が小さいや。面倒くさい。はだしで行かう。」

「そんなら僕のと替へよう。僕のは少し大きいんだよ。」

「替へよう。あ、丁度いゝぜ。ありがたう。」

「わたし困ってしまふわ、おっかさんに貰った新しい外套が見えないんですもの。」

「早くおさがしなさいよ。どの枝に置いたの。」

「忘れてしまったわ。」

「困ったわね。これから非常に寒いんでせう。どうしても見附けないといけなくってよ。」

「そら、ね。いゝぱんだらう。ほし葡萄が一寸顔を出してるだらう。早くかばんへ入れ給へ。もうお日さまがお出ましになるよ。」

「ありがたう。ぢや貰ふよ。ありがたう。一緒に行かうね。」

「困ったわ、わたし、どうしてもないわ。ほんたうにわたしどうしませう。」

「わたしと二人で行きませうよ。わたしのを時々貸してあげるわ。凍えたら一緒に死にませうよ。」

東の空が白く燃え、ユラリユラリと揺れはじめました。おっかさんの木はまるで死んだやうになってじっと立ってゐます。

突然光の束が黄金の矢のやうに一度に飛んで来ました。子供らはまるで飛びあがる位輝やきました。

北から氷のやうに冷たい透きとほった風がゴーッと吹いて来ました。

「さよなら、おっかさん。」「さよなら、おっかさん。」子供らはみんな一度に雨のやうに枝から飛び下りました。

北風が笑って、

「今年もこれでまづさよならさよならって云ふわけだ。」と云ひながらつめたいガラスのマントをひらめかして向ふへ行ってしまひました。

お日様は燃える宝石のやうに東の空にかかり、あらんかぎりのかゞやきを悲しむ母親の木と旅に出た子供らとに投げておやりなさいました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集　第八巻」筑摩書房
　　1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行
　　1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行
入力：林　幸雄
校正：久保格
2002年11月10日作成
2008年10月8日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

いてふの実

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/